

洋書紹介

Just so Stories

by

Rudyard Kipling

Doubleday & Company, Inc.

Garden City New York

Copyright 1902, 1907

—つづき—

江 波 諄 子

引き続き、キップリングのお話集の中から、ふたつご紹介いたしますしよ。

最初は、「サイはどうしてあのような皮膚になったか」というお話です。ご存知のように、サイの身体じゅうをおおっている皮膚は、しわくちゃで、だぶだぶしていますね。そのわけがこのお話の中に出て来ます。

昔、赤海という海にある無人島にひとりのパーシー人が住んでおりました。その人の帽子からは、太陽の光線が東方の光以上に反射して輝いていました。彼は、この無人島にひとり、光る帽子と、ナイフと、あなた方が見たこともないようなストープのほかは、何も持たないで暮らしておりました。ある日、彼は、小麦と、水と、干ぶどうと、すももと、砂とうを持ってきて、ケーキをつくり始めました。直径六十センチメートル、厚さ九十センチメートルもある大きなものでした。彼は、ケーキをストープの上のせて、こんがりきつね色になるまで焼きました。そして、ちょうど彼が焼き上がったケーキを食べようとした時に、一匹のサイが鼻の上につのをつけ、豚のような目をして無作法にもやって来ました。そのころは、サイの皮膚はピンとはって、身体にびったりとくっついていました。サイはケーキを見て、「なんと!!」と

叫びましたので、パーシー人はこわくなって、帽子のほかは何も持たずに、そばにあったやしの木のでっぺんに、よじ登ってしまいました。彼の帽子からは、大陽の光線が東方の光以上に反射して輝いていました、サイは鼻でストーブをひっくり返し、ケーキを全部たいらげてしまいました。そして、しっぽを振りながら、荒涼とした奥地へ去ってしまいました。パーシー人は、やしの木から降りてきて、何やらじゅ文のようなものをつぶやきます。

五週間すると、赤海は熱の波におそわれました。誰もが着ているものを全部ぬぎました。パーシー人は帽子をとり、サイは皮をぬぎました。そのころ、サイは三つボタンを下の方でとめ、防水服のように皮を着ていました。サイは、水の中をよたよた歩き、鼻で泡をふき、海岸の方へ泳ぎにいきました。そこへ、パーシー人がやって来て、サイのぬぎすてである皮をみつめました。パーシー人はしめたとはかりよるこんで、両手をこすり合わせました。彼は、自分の住み家へもどり、帽子の中に、古いケーキのポロポロになったくずを一杯入れてきます。パーシー人は、ケーキのほかは何も食はず、住み家も一度もお掃除したことがなかったので、ケーキのくずはたくさんありました。彼は、持って来た古いケーキのくずや、こげた干ぶどうで、サイの皮を思いきりこしこしとこすりました。それからやしの木のほり、サイが水から

あがってくるのをまちました。サイはやがて岸へやってきて、ぬいでおいた皮を着て、下の方を三つボタンでとめます。すると、どうでしょう。サイはまるで、ベッドの中にケーキのくずが入っているような、むずむずした気持ちになりました。サイは、かゆくなったのでかき出すと、ますますかゆくなりました。砂の上にて、ごろごろとこころがるのですが、ケーキのくずはますます広がり、かゆくなりました。それからサイは、やしの木のそばに来て自分の身体をこすりつけました。あんまり強くこすりつけましたので、サイの皮は肩のところには大きなしわができてしまいました。そのうちに、下の方にも別のしわができてはじめてました。ちょうどそこはボタンのあったところなのですが、サイはボタンをこすり取ってしまったのでした。脚もこすると、しわができてしまいました。サイは大変いらいらするのですが、ケーキのくずは前と全く変わりません。それはサイの皮の内側にあつて、むずむずとくすぐるのです。サイは家へ帰り、とつてもおこつて、恐ろしいほど、身体をかきました。その時からサイには、あのようにたくさんしわが皮膚にあり、いらいらした性質になつてしまったのです、それは全部、ケーキのくずが皮の内側に入っているためなのです。

次は、「最初の文字は、どのようにして書かれたか」というお話です。

ずい分前のことです。人間が石の道具をつかつて生活していたころのことです。大変、原始的な人が住んでおりました。彼はお腹がすいている時以外は、大変幸せでした。彼は名前を、テグマイ・ポプシュレイといい、奥さんの名前は、テシュマイ・テウインドロウといいました。ふたりには小さな娘があり、名前をタフイマイ・メタルマイ（タッフイ）といいました。三人は大変幸せに暮らしていました。

ある日、テグマイは魚を槍でつくだめに、ビーバーの沼をぬけて、ワガイ川へ出かけて行きました。夕食のために鯉をとるためです。タッフイも、もちろんついて行きました。テグマイの槍は木でできており、先にはさめの歯がついていました。ところが、テグマイは魚つきをする前に、まちがって槍をまっぶたつに割ってしまいました。ほら穴の家からずい分速くに来てしまったし、テグマイは、余分の槍を持つてくるのを忘れてしまいました。こわれた槍を修理するには、半日もかかります。テグマイは、しかたなく槍をなおしはじめます。タッフイは、お父さんに、家までとりに行って来るというのですが、お父さんは、「お前の足では

遠すぎるよ」というのです。お父さんのテグマイは、となかいの筋肉や、皮の切れはしや、ハチのワックスや、松やにのいった修繕袋をとり出して、槍をなおしはじめます。タッフイは、そばにすわって考えます。「ねえ、お父さん、どうやって字を書くか知らないっていうことは不便なことね。もし知っていたら、メッセージを書いて新しい槍をもつてくれることができるのに」とタッフイはテグマイにいいました。ちょうどその時、見知らぬ人がふたりのそばへやって来ました。その人は、全く別の種族の人でした。テグマイは気づかず、一生懸命に槍をなおしています。その見知らぬ人は、タッフイにはほえみかけました。なぜなら、彼の家にも小さな娘がひとりいたからです。タッフイは、「こっちへいらっしやい。あなた、私のお母さんがどこに住んでいるか知っている？」と話しかけます。その人は「ウーム」といったきりです。彼にはタッフイのことはわからないのです。テグマイは、相変らず槍をなおしています。タッフイは一生懸命に見知らぬ人に、今お父さんがしていることを説明します。見知らぬ人は、タッフイのいっていることはわかりませんでした。この子はきつとすばらしい子だ。この子のお父さんは高貴な酋長で、私には目もくれない。けれど私はこの子のいうことをきかないと、あの酋長にひどい目にあわされるだろう」と思いました。見知らぬ人

は、樺の木の皮を切り取り、タッフィにあげます。それは、彼の心がその皮のように白く、何もこわいことはしないということを示すためでした。ところがタッフィは、彼がその樺の木の皮に、お母さんの住んでいる所を書いてくれといっているのだと思ってしまうのです。彼女は、この見知らぬ人が首にかけていたかざりから、さめの歯をひっぱってとりまします。このさめの歯にさわったものは、誰でもすぐに手がふくれ、はれつするといわれてきたのに、タッフィはふくれもはれつもしません。見知らぬ人は、ますますタッフィのことを「この子は、非常に非常に、非常にすばらしい子だ」と思ってしまう。タッフィはさめの歯で樺の木の皮に絵を描きはじめます。最初は、お父さんがお魚つりをしているところ、それから、この見知らぬ人にもって来てほしい槍を念のため三回描きます。そして自分自身の絵と、見知らぬ人の絵、それから彼女たちが住んでいるほら穴の家へ行く道順を描き、ビーバーの絵も描きました。そして最後にお母さんの絵も描きそえます。見知らぬ人はその絵をみてこう思います。「これはどこかで大きな戦争が行なわれているのかもしれない。私がおもこの偉大な酋長を助けなければ、彼は敵に殺されてしまうだろう。彼が私に気づかないふりをしているのは、敵が木のしげみの中にかくれていて、私にメッセージを渡すのをみているのを恐れているた

めだ」そして、この見知らぬ人は、タッフィが描いた樺の木の皮を手にも、風のように立ち去りました。お父さんのテグマイは相変らず槍をなおしています。そばでタッフィは満足そうにいいまします。「ねえ、お父さん、もう少したつときとびっくりするわよ」彼女は、見知らぬ人がメッセージを持ってお母さんの所へ行き、かわりの槍を持って来てくれるものと信じていたのです。見知らぬ人は何マイルも走り、偶然にもほら穴の入口でお母さんのテグマイをみつけます。そしてタッフィが描いた絵を渡します。するとテグマイは、この絵をみるやいなや金切り声をあげ、ほかの女の人たちをよんできます。そしてこの見知らぬ人ははりたおします。六人の女の人たちが一列にならび彼の上にすわりこんでいます。テグマイは、その間に彼の髪をひっぱります。彼女は、この男が槍でテグマイをつつき、タッフィをこわがらせたのだと思ってしまうのです。女の人たちは見知らぬ男の髪を泥でぐしゃぐしゃにしています。そして同じ種族の酋長をよんで、見知らぬ人を捕え、川の方へ案内させました。見知らぬ人は言葉もわからず、本当に困ってしまいました。一行はテグマイとタッフィのいるワガイ川へやってきました。そこではタッフィはひなぎくで輪をつくり、テグマイは、注意深そうになおした槍で鯉をついているのだ。タッフィはこんなに早く、しかも大勢

がやって来たのでびつくりしてしまいました。お父さんのテグマイは、みんながさわぐので鯉が逃げ、魚つりがだめになったとがっかりしてしまいました。そこへ、テシュマイが走り寄り、タッフイにキスをして彼女を抱きます。そして、「どうしたの」とタッフイに尋ねます。「私はこの見知らぬ人に、お父さんの別の槍をもって来てくれるようにたのんだのに、一体あなたたちは、このすてきな見知らぬ人に何をしたの」と、タッフイはいいました。見知らぬ人は、けられ、目がぐるぐるともわり、あえいでいます。お母さんのテシュマイは「あなたを槍でやつけた悪い人はどこにいるの」と尋ねます。「そんな人どこにもいないよ」とテグマイが答えました。そこでタッフイはすべてをうちあげ、絵のことも説明しました。すると、酋長は笑い出し、みんながワガイ川の堤にころがって笑いました。お父さんはタッフイをなぐさめ、「お前のしたことは偉大な発明だ。いつかみんなはそれを書くことだと呼ぶだろう。今は絵だけでも絵では正しくわかってもらえない。だからいつか私たちは文字というものをつくり、書いて読んだりできるようになるだろう」といいました。みんなが笑いました。女の人たちは、見知らぬ人の髪についた泥を洗い流してやりました。彼はこの間、とても紳士でしたので、テグマイたちの仲間にむかえ入れられることになりました。その日から、小

さな女の子は、タッフイのように、字を書いたり読んだりするよりも、絵を描く方がずうっと好きなのです。

キップリングは、イギリスの作家ですが今はすでにこの世を去っています。彼は子ども時代を父親の都合でインドで何年か過ごしております。彼の作品は日本語では、ほとんど紹介されてはいませんが、イギリスやアメリカでは大変に親しまれました。原文そのものと、ところどころに挿入されたイラストが読む楽しさを一層増しているようです。

(十文字学園女子短期大学)

